

公的機関なのに、その懐の大きさ、深さに感服

先日、養護教育センターでの研修会の講義（「雑学」バックナンバー「講義等関係（Ⅱ）P2005. 9.27.講義3・「重症児への教育的対応」・レジメ：参照）を頼まれ行ってきた。

約8年前から関わっている元学生で今は大学院で学ぶ岡澤君を誘い、講義の一部として彼が取り組んでいる事例ビデオを見せながら話しても貰った。

若い人に、こうした人前で話す機会を与えて育てるのも、今の自分の任かなとも思っている。なんちゃってカッコをつけたが、2時間半も話すのも大変なので、彼に手伝わせたというのが本音だったかも……。歳を重ねると、こうしたずるさも身に着いちゃったかな？

教育センターの研修担当者等から、後刻、後日、次のようなメールを早速いただいた。

「今日の講演は阿部さんのいつものようなストレートな話を聞くことができ、嬉しかったです。岡澤君の事例から、超重度障害児の教育問題から考えさせられることは、きっと教育一般にも通じるものであったと思います。分からないことの多い直接経験することはまれな事例ではあると思いますが、教育とは何か、かかわり手のあり方、連携とは何かなど、考えさせられたのではないかと思います。教育相談で話を聞けなかった長期研究員に、〇〇研究員から早速伝達講習がなされていました。阿部さんがまとめとして説明されていた相互交渉については、確かに欠けている人が多いなあと思いました。今日は充実した一日になりました。」

・「昨日の研修講座では、講義いただきありがとうございました。医療的ケアに関することをはじめ、含蓄のあるたくさんのことばを聴くことができ、熱い思いがこみ上げてきました。自分自身の実践を振り返り、『まず、子どもありき』であることの大切さを強く再確認しました。受講者も同じ思いを感じたと思います。」

こうしたメールをいただくと、自分勝手に彼を連れて行っただけに、その甲斐があったとホッとした。

自分こそ、話す機会を与えていただき、感謝している。

それにしても、こうした県立の養護教育センターの研修会の講師は、大概どこかの大学のその道の教授、助教授に依頼することが多いはず。

今は全くのフリーターで、しかも阿部節（？）で語るだけの自分を講師として招く、この公的研修機関の懐の大きさ、深さに感服した。

他にも異色の講師を招いているのだろうかあ～。ありきたりでないこうした意識での企画研修こそ、自分も聴講したくなった。

（2005年9月29日 記）